

## 万葉集

- 成立・・・①（奈良）時代末期  
 ○歌の数・・・約②（四千五百）首  
 ○特徴・・・現存する③（日本最古）の歌集。

天皇・貴族・兵士・農民にいたるまで幅広い階層の人々の  
 ④（素朴）な感動が、生き生きと力強く歌われる。  
 五七調（ますらをぶり）

ア（じ）  
 持統天皇

春過ぎて 夏来るらし／白たへの 衣乾したり／天の香具山

枕詞

体言止め

〔大意〕春が過ぎて、夏がどうやら①（来たらしい）。

②（真っ白）な衣が干してある。天の香具山に。

《句切れ》・・・③（二句切れ・四句切れ）

【表現】・・・初夏の山④（緑）と衣⑤（白）の対比

⑥「体言止め」・・・体言で切り余韻を残す技法

⑦「枕詞」・・・ある言葉を引き出すための前置きで

五音でなる。

歌聖 「いろは歌」？

柿本 人麻呂

東の野に炎の立つ見えて かへり見すれば月傾きぬ

〔大意〕東方の野には⑧（あけぼの）のさしそめるのが見えて、西を

振り返ると、⑨（月）が傾いて淡い色をたたえている。

《句切れ》・・・⑩（句切れなし）

【表現】・・・季節は⑪（厳冬）の⑫（早朝）

恋歌 万葉力（お）

額田王

君待つと 吾が恋ひをれば

我が屋戸の すだれ動かし 秋の風吹く

〔大意〕わが君をお待ちして⑬（恋しく思っている）と、私の家

の戸口のすだれを動かして、秋の風が吹いてくる。

《句切れ》・・・⑭（句切れなし）

【表現】・・・「君」とは⑮（天皇・恋しいあなた）を指す。

やまべのあかひと  
山部 赤人

天地あめつちの 分わかれし時ときゆ 神かみさびて 高くたふと貴たふとき

枕詞

駿河なる 富士たかねの高嶺たかねを 天あめの原 振り放さけ見れば

枕詞

を

渡る日ひの 影かげも隠かくらひ 照る月つきの 光ひかりも見えず

ウ(い)対句

係り結びの法則

白雲しらくもも い行きはばかり 時ときじくそ 雪ゆきは降りける

エ(い)

オ(ん)

倒置法

語り継つぎぎ 言ことひ継つぎぎ行ゆかむ 不ふ尽じんの高嶺たかねは

【大意】

天と地が分かれた神代の昔から、①( 神々しくて ) 高く

貴い、駿河(静岡)にある富士の高嶺を、大空はるかに

②( 振り仰いでみる ) と、空を渡る太陽の光も隠れ、

照る月の光も見えず、白雲も山にはばまれて行きとどこお

り、③( 時を選ばずに ) 雪が降っている。

いつの世までも語り継ぎ、言い継いで④( いこう )、

この富士の高嶺のことを。

【表現】

⑤ 「対句法」・・・語句を一对に配置し、対照的に表現す

ること 「渡る日の・・・照る月の・・・」

⑥ 「係り結びの法則」・・・係助詞⑦「そ」がくることで

結びが、「けり」の連体形⑧「ける」になる。

⑨ 「倒置法」 「文の成分の位置を入れ替えて印象づける。

反歌はんか

⑩ ( 長歌の後に詠み添える歌 ) 長歌の意味を、要約し

たり、補足したりする\*長歌(五七五七七・・・五七七)。

田児たごの浦うらゆ うち出ででて見れば

真白ましろにそ 不ふ尽じんの高嶺たかねに 雪ゆきは降りける

【大意】

田児の浦を通って、視野の開けた所へ出て見ると、真っ白に

富士の高嶺に雪が降り積もっていることだ。

万葉三歌人(「万葉集」の中での代表歌人)

柿本かきもと人麻呂ひとまろ 万葉第一の歌人と称される。(東の・・・)

山部やまべ 赤人あかひと 自然を題材にしたものが多く、人麻呂と並び称されている。

(天地の・・・、田児の浦ゆ)

山上やまのうへ 憶良おくら 思想性と温かい人間愛。人生詩人と言われる。(憶良らは)

# 君待つと

授業プリント3

家族愛

ア(え) 山上 憶良

憶良らは 今は罷らむ

ウ(ん) 子 エ(う)

子泣くらむ / そを負ふ母も 吾を待つらむそ

オ(ん)

「大意」私、憶良めはもうこれで①(退出しよう)。家では今こ

ろ子供たちが泣いているでしょうし、②(その子供)を背負っている母も私を③(待っているでしょうから)。

《句切れ》・・・④(二句切れ・三句切れ)

序詞

ク(ず) 東歌

多摩川に さらす手作り / 二句切れ

係り結びの法則

さらさらに 何そこの児の ここだ愛しき

「大意」多摩川にさらす手作りの麻布のように、⑤(さらにさらに)どうしてこの子がかんなにも⑥(いとしい)のだろうか。

「表現」⑦「係り結び」・・・係助詞⑧「そ」がくることで結びが、「愛し」の連体形⑨「愛しき」になる。

⑩「序詞」：他の言葉を引き出す前置きで七音以上。

⑪(さきもりのうた)

## 防人歌

父母が頭かき撫で「幸くあれ」ていひし言葉ぜ 忘れかねつる

ケ(い)

係り結びの法則

「大意」父母が頭を撫でて⑫「達者でいろや」と言った言葉が忘

れられない。

「表現」⑬「係り結び」・・・係助詞⑭「ぜ」がくることで結び

が「つ」の連体形⑮「つる」になる。

主に東国出身者が多かったため、なまりが強い。

↓⑯「て、言葉(けとば)ぜ」

## 防人の歌

辺境(主に北九州)の防備に三年の任期で集められた農民や残された家族の作った歌。東国(静岡県より東)の人が多く、家族への強い愛情を歌っている。



# 君待つと

授業プリント5

## 古今和歌集

「古」は万葉集を指す

○特徴・・・天皇の命令（勅命）によって作られた、最初の

①（勅撰和歌集）。

春・夏・秋・冬・②（恋）に分類

七五調（たをやめぶり）

さあ

古今和歌集の撰者

紀貫之

人はいさ 心も知らず

／ 二句切れ

梅 係り結びの法則

ふるさとは 花ぞ昔の 香にほひける

「大意」かつて親しんだ③（人）の心は変わったかもしれない。

だが、昔なじみのこの家の④（梅）の花は、昔のままの香りを香らせて美しく咲いていますね。

【表現】⑤「係り結び」・・・係助詞⑥「ぞ」がくることで結びが、

「けり」の連体形⑦「ける」になる。

《対比》 変わりやすいもの⑧（人の心）

変わらないもの⑨（花の香）

イ（じわ）

藤原 敏行

秋来ぬと 目にはさやかに 見えねども 風の音にぞ おどろかねぬ

句切れなし

「大意」秋が来たと、目には⑩（はつきり）と見えるのではないが、⑪（風の音）にはっとして気づかされたことであるよ。

【表現】⑫「係り結び」・・・係助詞⑬「ぞ」がくることで結びが、

「ぬ」の連体形⑭「ぬる」になる。

六歌仙

イ（い）

感動の「よ」が

ウ（ん）

ア（お）のこまち

思ひつつ 寝ればや人の 見えつらむ

／ 三句切れ

夢と知りせば 覚めざらましを

「大意」あの人を心の中で思いながら眠りについたので、夢にふと

⑮（現れたの）だろうか。それが夢と知っていたならば、わたしは⑯（目を覚まさなかったのに）。

作者は、普段、この「人」⑰（恋人）に逢えなかったもので、はかない⑱（夢）にすがってでも逢いたいというやるせない恋の思い。

# 君待つと 新古今和歌集

授業プリント6

- 成立・・・①（鎌倉）時代初期  
○歌の数・・・約②（千九百八十）首  
○特徴・・・後鳥羽上皇の命令（勅命）によって作られた、八番目の③（勅撰和歌集）。

道の辺に 清水流るる 柳かげ／ 三句切れ

ア（よ）イ（う）  
西行 法師

「しばし」とてこそ 立ちどまりつれ

「大意」道のほとりに清水の流れている柳の木陰よ。④「く休もう」と思つて立ち止まったのだったが、あまりに

⑤（涼しいので）、思わず時を過ごしてしまった。

【表現】⑥「係り結び」・・・係助詞⑦「こそ」がくることで結びが、「つる」の連体形⑧「つれ」になる。

・西行 法師：生涯を旅の歌人として送り、後に影響を与えた。  
↓江戸時代の俳人⑨（松尾芭蕉）への影響

ウ（じわ）エ（え）  
藤原 定家

見わたせば 花も紅葉も なかりけり／ 三句切れ

浦の苦屋の 秋の夕暮 体言止め

「大意」見わたすと、色美しい⑩（花）はもとより、秋にふさわしい⑪（紅葉）すらもないことだ。苦葺きの海女の小屋のみが目にとまるこの浦の秋の夕暮れは。

【表現】⑫「体言止め」最後を体言で結び、意味を強めたり、余韻を残す技法

⑬「幽玄」・・・貴族的な華やかな美ではなく、寂しさを中心としたわびしさの美しさ

⑭「本歌取り」・・・有名な古歌の一部、イメージを、それとわかるように歌の中で用い、歌の背後に古歌のイメージをだぶらせる表現技法。

《句切れ》・・・⑮（三句切れ）

・藤原 定家：「小倉百人一首」や『新古今和歌集』の選者・中心人物。



玉の緒よ／ **初句切れ** 絶えなば絶えね／ **二句切れ**  
イ(え)

ながらへば忍ぶることのよわりもぞ する

【大意】わたしの①( **命** )よ。絶えるのなら絶えてしまえ。生き続けたなら、恋心を隠す心が弱って、人に②( **隠し続ける** )ことができなくなるだろうから。

【表現】③「 **係り結びの法則** 」・・・係助詞④「 **ぞ** 」がきて結びが「す」の連体形⑤「 **する** 」になる。

⑥「 **縁語** 」・・・一つの言葉に縁のある語を使う。  
ここでは「緒」に縁のある⑦「 **絶え** 」、⑧「 **ながら** 」、  
⑨「 **よわり** 」。

《句切れ》・・・⑩( **初句・二句切れ** )

## 表現確認

**枕詞** 主に五音からなり、ある語句を導き出すために、ある特定の言葉の上に置く修辭的な言葉。

例 からころも↓着る、裾 白袴の↓衣 天の原↓ふりさけみる

**序詞** 七音以上からなり、ある語句を導き出すために、前置きとして用いられる修辭的な言葉。 例 多摩川にさらす手作り↓さらさらに

**対句** 意味の対照的な同形式の語句を前後に対置して、リズム感を出す。  
例 「渡る日の 影も隠らひ」と「照る月の 光も見えず」など

**体言止め** 一首の末尾を体言(名詞)で終わらせるもの。  
例 「・天の香具山」「・をとめ」「・秋の夕暮」など

**倒置法** 主語と述語などの順序を逆に叙述する技法。  
例 「語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 不尽の高嶺は」

**本歌取り** すでにある古歌(本歌)の語句を意識的に取り入れる技法  
例 「見わたせば・・・」の歌。

**縁語** 一つの言葉に縁のある語を使う。

例 「玉の緒よ…」の歌 「緒」に関連する「絶え・ながら・よわり」

**係り結びの法則** 「ぞ・なむ・や・か・こそ」が来れば、文末が変わる。